

別紙 2

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 小村優太

小村優太氏の「イブン・シーナーにおける内的感覚論の形成と発展」は、中世アラビア語世界の哲学者イブン・シーナー（980～1037年）の認識論における「内的感覚」に関する議論を、古代ギリシアまでさかのぼり、その系譜と彼自身の思想における展開を明らかにしたものである。イブン・シーナーは、アリストテレス、新プラトン主義を中心とするギリシア思想を摂取し、それを独自の視点から集大成した。本論文は、このようなアラビア思想史上最大の哲学者の一人であるイブン・シーナーの思想の形成と発展を、内的感覚というこれまで注目されてこなかった概念を軸に、原典のアラビア語テキストを丹念に追いつきながら跡づけた労作である。

本論文は全五章で構成されており、各章の内容は以下のとおりである。

第一章では、イブン・シーナーの思想の展開の背景を探るべく、主に自伝を手掛かりに、彼の生涯とその作品について叙述がなされる。彼は決して平坦とは言えないその生涯のうち数多くの著作を残しているが、それらの多くは困難な状況のもとで書かれたものである。本章ではそうした彼の生涯をたどりながら、本論で扱う著作の生まれた背景と意図が論じられる。

第二章では、ギリシアにおいて内的感覚についてどのように議論されたかが述べられる。内的感覚論はその淵源をアリストテレスに見出すことができるが、重要なテーマとして論じられているわけではなく、むしろ後世の註釈家たちによって解説・解釈がなされたことで発展していく。そしてそれがさらに古代ギリシア最大の医学者であるガレノスへと接続し、小村氏はここにアラビア語世界でイブン・シーナーへとつながる内的感覚論の原型を見出す。そのもっとも大きな特徴は、内的感覚を脳の構造と結びつけて理解したことにあるという。

第三章では、イブン・シーナーより前のアラビア語世界における内的感覚論の展開が分析されている。その始まりは、アラビア語圏最初の哲学者とされるキンディーや、その同時代人フナイン・イブン・イスハーク、アブー・バクル・ラージーといった学者による翻訳活動である。それを通してアリストテレスやガレノス、新プラトン主義の影響がアラビア語世界に流れ込み、イブン・シーナーへとつながった。本章では、こうした思想や概念の流れを、ギリシア語とアラビア語を対照させながら、翻訳という作業によって思想が形成されていくプロセスが丁寧に明かされる。

第四章と第五章では、いよいよ本題のイブン・シーナーの内的感覚の概念の発展が論じられる。まず第四章では、イブン・シーナーが17歳で書いた初の哲学書『魂論摘要』から、

独自の哲学を完成させていく出発点とされる『始原と帰還』まで、内的感覚論がどのように変わっていったかが詳述される。とりわけその特徴は、ガレノスの影響下で、脳の空腔に精神的な諸能力が位置づけられ、それを踏まえて前方に共通感覚、中央に表象力もしくは思考力、後方に記憶力が配置され、脳全体に判断力を位置づけた点である。

第五章は『人間的魂の状態』、『治癒の書』、『救済の書』といった、彼の著述活動の中期から後期にかけての作品を取り上げ、内容的に該当する部分が照合される。これらの中間の時期に書かれた『治癒の書』だけに見られる独自の内容が取り出され、最後の部分では、内的感覚を人間の認識におけるそれ以外の二つの要素、つまり外的な五感と知性から明確に区別しようとするイブン・シーナーの試みが論じられる。これによって内的感覚という、身体と知性の中間に位置する能力の範囲がいっそう明確にされる。

このような論文に関して、審査会の冒頭で、小村氏本人から補足があった——イブン・シーナーの著作は、中世ヨーロッパで翻訳され、その間の流れは研究が進んでいるが、古代ギリシアから彼に至る思想的展開については、あまり研究されてこなかった。またイブン・シーナーについては、もっぱら知性論や存在論ばかりが注目され、内的感覚については積極的に論じられてこなかった。本論文は、まさにこうした二重の意味で未開拓の領域に取り組んだものであるということが、改めて強調された。

審査委員からは、このような小村氏の論文の意義が十分に認められ、その詳細かつ緻密な議論が高く評価された。そのうえで、アラビア語やギリシア語についての不備、および訳文や訳語の分かりにくさが指摘された。またトマス・アクィナスを頂点とする中世哲学とのつながりや、イブン・シーナーの思想全体、また彼の医学との関わりについて質問がなされ、もっと深く追求すべき点が浮き彫りになった。また、今後の展望について、イブン・シーナーのどこに焦点を当てて研究していくか、今日の社会におけるアクチュアリティをどのように考えるかなど、質問や期待が審査委員から発せられた。こうした質問に対して、小村氏からは十分な応答がなされた。

そもそもイブン・シーナーを論じるには、ギリシア語、アラビア語、ラテン語に精通していなければならず、先行研究としては英語、フランス語、ドイツ語の文献を読みこなさねばならない。このようなことは大学院生でなくても、一人の研究者のキャパシティを超えることで、ある程度の不備はやむを得ないことである。それよりもこのような思い切った研究を成し遂げたことの価値は、審査委員全員が認めるところであった。また今後の展望についても、これほど多言語、多文化にまたがり、長期にわたる思想の展開を研究するのは一人の研究者の手には余ることであり、小村氏にはぜひ様々な専門分野の人との共同研究を立ち上げてほしいという期待が寄せられた。

以上のことから本審査委員会は、小村優太氏の学位請求論文が、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであると認定することに、全員一致で合意した。